

<書評>全訳注杉本圭三郎『平家物語全訳注』 全十二巻

麻原, 美子 / アサハラ, ヨシコ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

45

(開始ページ / Start Page)

82

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

1992-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019645>

書評

全訳注 杉本圭三郎

『平家物語 全訳注』全十二巻

麻原 美子

昭和五十四年（一九七九年）より、一年一卷の予定で刊行されてきた杉本圭三郎氏の『平家物語 全訳注』が、平成三年（一九九一年）にめでたく完結した。これによって『平家物語』注釈研究史上に、重要な一頁が書き加えられることになったことは、誠に同慶の至りである。特に本書が文庫本という体裁で提供されたことにより、従来の専門的、学問的という固いイメージから解き放たれて、一般社会人に、より身近かで親しまれる読み物としての古典、という親近感を抱かせることになった功績は大きいものがある。この普及度をはかる指数の増刷をみると、巻一、二は既に

十版を重ね、巻三、四は九版ということであり、この種のものとしては空前の数字である。『源氏物語』に比べると、内容の固さ暗さから敬遠されがちな『平家物語』のこの普及度は、一にも二にも杉本圭三郎氏の読ませる力量によるもので、敬服に値することである。

次に一冊の本が十二年かけて刊行されたということも、注目されることである。出版界の常識からいえば、普通ではできないことである。版元が講談社であるにしても、編集者と著者との間の深い信頼と息の長い協力関係がなくては、到底実現しないことは確かであり、こうした企画が達成されたことに敬意を表したい。これを執筆者の立場からいうと、一卷に一年という時間をたっぷりかけることができたということ、大変な幸運に恵まれたといえよう。本書の出来栄えの見事さは、ひとえに即席仕込みではないことにあり、準備、執筆、推敲、校正の各段階で、熟成の度を加えて、豊醇な銘酒のような味わいが醸し出されたことにある。これが本書の大きな魅力の源泉になっているといえる。

『平家物語』の注釈研究は近年益々充実の度を加え、覚一本のみでなく、百二十句本、屋代本、源平盛衰記にも及んでいるが、全訳注となると、代表的本文としての覚一本のみであり、こうなるのは、或る意味で仕方のないことなのかもしれない。本書の底本は高野本と称される東京大学国語研究室所蔵の覚一別本で、これは全訳の日本古典全集『平家物語』とも同一である。また昭和三十八年刊行の全訳注の一つ、佐々木八郎氏の『平家物語評講』上・下の底本とも同じである。即ち覚一別本の高野本に対して、全訳が三つあるということになる。全訳としてはもう一つ昭和四十一年（四十二年刊）の富倉徳次郎氏の『平家物語全訳』（全四冊）があるが、これは米沢図書館蔵本の葉子十行本で、覚一本から流布本に至る過程の本文である。このように全訳注の四つの本文は覚一本系統であるが、しかし内容は決して同じではなく、訳注者の有する『平家物語』観が根底に流れており、それが作品解釈に投影し、解説における重点の置き方に現われていて、内在化した問題意識はそこ、に顔を出している。

本書もそうした点で、前三者に勝るとも劣らない特質・独自性を有していることはいうまでもない。

著者は凡例で、語釈、現代語訳、解説の本書の構成の三本柱に対する基本方針を、次のように掲げている。語釈については、語句の文脈のなかでの意味を簡潔に述べることを主とし、考証的な詮索には及ばなかったこと、現代語訳は原文の解釈的表現を意図したので、語順を変えたり、語を補ったりし、また現代文としての自主性を考えて、本文の語を省いたりしたところもあること、解説は、作品としての享受、鑑賞に主眼をおき、史料と対比して史実と文学の問題を考察し、紙幅の許すかぎり諸本の大きな異同と、その意味するものに言及することを心掛けた、というものである。本書はまさに右の三点にこそ独自性が発揮されているといえる。語釈は的確に必要な範囲内でという抑制のきいたもので、文庫本という簡便さを身上とする体裁にびつたりである。現代語訳は国文学者のものは、得てして原文に忠実に文法的用法に基づいて解釈するという古典解釈法に縛られて、現代

語として通用しなかったり、生きた言語としての面白さに欠けていたりするのが通弊であった。この堅さが原文で読めない一般人に、古典は面白くないという印象を与えてしまったようである。本書はそうした批判に見事に応じたもので、現代語として全く抵抗感がなく、流麗である。これは日頃の考えるところとも一致し、快哉を叫びたいところである。しかしこの流麗さを得る為に著者がどんなに表現に苦慮されたか、そのご苦労の程がしのばれる。次に解説では、一見何でもないようにさりげなく筆が進められているが、実に丹念で、その箇所を読むのに必要な史料はすべて網羅され、しかもその史料の解説つきで、読み易く工夫されている。また諸伝本の異同にも目が行届いていて、しかも研究者にありがちな興味に走ることなく、それとなく『平家物語』本文の広がりやうかがわせるという手法は好ましい。ただこの解説で欲をい

えば、氏ご自身が目的とされている史実と文学の問題に関して、関係史料が列挙式であるために、本文とのかかわりを考える場合に平板であり、ある種の物足りなさが感

じられる。しかしこれは本書の性格から、氏がいたずらな詮索に走ることに禁欲的であったことに、原因があるかと憶測する次第である。

『平家物語』を長年研究してきた私にとって、実は心ひそかに本書のような現代語訳を書きたいと日頃考えてきた。このたび本書の出現で私のもくろみははかなく消え去ったが、私にはこのような素晴らしい完成度を生み出す力量に欠けていたと自認するだけに、心から本書の完成を慶賀した思いで、書評の請を受けたことを付記しておく。

(あさはら よしこ・日本女子大学教授)

(講談社学術文庫 全十二巻 文庫判)

▽著者 文学部教授